

## 没理想論争注釈稿（九）

坂井健

### 〔抄録〕

森鷗外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争と言われる「没理想論争」についての注釈のうち、逍遙の鷗外への反論である「烏有先生に答ふ」（三）についての注釈。「没理想論争」については、さまざまに論じられているが、そうした論が細部の読みの共通理解の上でなされているかという点、必ずしもそうではなく、ややもすれば机上の空論になりかねない。また、注釈についても、語釈のレベルにとどまり、視点も個別作家の文学論に限定されがちであった。そこで、本稿では、語句の注釈から出発して、

解釈にまで踏み込み、両者の文学論争を総合的に捉えることを第一の目的とする。さらに時代を代表する二大作家の論争を通して、当時の文壇の文学思潮を探り、論争の後の文壇に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を新たに文学史の中で位置づけることを第二の目的とする。

キーワード 没理想、イデー、森鷗外、坪内逍遙、文芸批評

### 烏有先生に答ふ

#### 其三<sup>①</sup>

烏有先生、已に一大系の哲理を信じて、世界は実なるのみにあらで、

想も亦みち／＼たりとなし、孔雀の羽に紋理あるは、先天の理想の然らしむるなり、となし、美の理想あり、といひ、又これに適へる極致あり、といひ、目の色を覩て感じ、耳の声を聞きて感ずるは、先天の理想の、暗中より躍り出でて、此の声美なり、この色美なり、と叫ぶ故なり、となし、感納性の上にも理想あれば、製作性の上にも理想あり、となし、更に進みて論じて曰はく

「若し没理想を説く人のいへるが如く、言葉のうちにおのが理想のあらはれざる戯曲に長ずるためにシェークスピア大なり、おのが理想のあらはるゝ叙情詩もしくは小説に長ずるためにバイロン、スキフト小なりといはゞ、これシェークスピアとバイロンとスキフトとたま／＼其の詩体を殊にせし為に大小の別生じたるのみにて、その本来の分才境地には大小なかるべし」と。さてまた末段に至りて、再び此論を継ぎて曰く

「英吉利古今の文士の戯曲を作りしもの幾百家ぞ。その作りし戯曲幾千万篇ぞ。その幾千万篇か知れぬ戯曲は戯曲の体裁として作者自らが評論の詞をば挿まざりしならん。皆所謂没理想なりしならん。さるに彼の數百千家はその名骨と与に朽ちぬ。ひとりシェークスピアが威靈今にいたるまでもいやちこなるは何故ぞ。彼の數百千家は小家数にして、ひとりシェークスピアの大詩人たるは何故ぞ。又叙情詩に小説とは作者の理想あらはるといひ、没理想に至ること能はずといはゞ、叙情詩に長ずる大詩人は、小説に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか。又叙事詩の旨は純粹なる客觀相にあれば、その没理想に至り易きこと廻に戯曲の上にあらむ。又没理想を説く

人の戯曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ。おほよそ是等の間に答ふる人なき間はシェークスピアに理想なしともいはず。理想なきを大詩人の本相なりともいはず。」

と。此の段の議論、全く没理想の字義に就きて、先生と我れと解を異にしたるより生じたり。先生の議論は論理の必然なるべし。若しも没理想といふ詞が無理想といふに同じくして、わが嘗て物したる緒言の中に、シェークスピアの大詩人たる由縁は、偏に理想なき所にあり、とやうに明言断定せしことあらんか、われ実に答ふべき詞を知らざらんが、われいまだ嘗て無理想といふ意味の没理想をシェークスピアの本体なりともいはず、不見理想といふ意味の没理想をも、大詩人の本領なり、といひしことなし。所詮、わが、『マクベス評註』の緒言に於てわきまへたることは、没理想（不見理想）の詩（ドラマ）を評するに當りて、区々たる「インタープリテーション」の、益少うして害多かるべきを陳べたるに止まれり。その言に曰はく

「第二の評釈即ち「インタープリテーション」は若し見識高き人の手に成れる時は、読みて頗る感深く益もあるべけれど、識卑き人の手に成れる時は、徒らに猫を解釈して虎の如くに言ひ倣し、迂闊なる読者をしてあらぬ誤解に陥らしむる恐れあり。さるはシェークスピアの作の甚だ自然に似たるより生ずることなり。」

と。わが緒言の本意まことにこゝに在り。詩を論ぜんともものしたるにもあらねば、シェークスピアを論ぜんともものしたるにもあらず。一意シェークスピアの作が自然に似たる由を断らんとてなり。別に題を設けて、シェークスピア総論の一斑とだに名づけざるを見て、わ

が本意は知らるべし。さればこそ「げにやシェークスピアは空前絶後の大詩人ならん。其の造化に似て際涯無く、其の大洋に似て広く深く、其の底知らぬ湖の如く、普く衆理想を容るゝ所は、恐らくは空前絶後なるべし。併しながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざるが故にあらぬか。これのみの理由によりて理想高大なりと云ふは信けがたし<sup>(12)</sup>」といひ、「若しシェークスピアを称美せんとならば、其の美術家たる伎倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙、其の想像の妙、其の着想の妙、これらをほめて空前といふも可く、絶後といふも可かるべし。只其の理想をほめて、強いて高しといふは信け難し。むしろ其の没理想なるをたゞふべし<sup>(13)</sup>」といひ、又多少の例を挙げて没理想（不見理想）の文章には、さまざまの解の下し得べきことをいひたる末に「此の證例甚だ不足なれども、没理想の必ずしも大理想にあらざることゝ、小理想の時としては没理想と見ゆる例とはなるべし。兎に角に、予は没理想（不見理想）の作を、理想（わが理想）をもて評釈することの、いとゞ要なかるべきを信ずるが故に、此のたびの評註にては、主として打見たる俣の趣きを描写することを力め、我が一料簡の解釈をば加へざるべし<sup>(14)</sup>。」とはいひたるなれ。わが没理想の詩論に關繫する所は、間接にして、評註の方法に關繫する所は、直接なること、弁せずとも明かなるべし。またシェークスピアが本領の美は、偏へに没理想（其の理想の見えざる所）にありとしもいはざるべし、明かなるべし。

注

(1) 其三・『早稲田文学』十号（明治二十五年二月二十五日）の「時文評論」欄掲載。「其一」、「其二」は九号の掲載。

(2) 出でて・初出「出で」。

(3) 烏有先生已に体系の：製作性の上にも理想あり、となし・『早稲田文学の没理想』（『しがらみ草紙』二七号、明治二十四年二月）の要約。以下、引用されている。鵬外文については、前稿「没理想論争注釈稿（二）」（『文芸言語研究 文芸篇』二二―二四、一九九二年九月―一九九三年九月）で注釈したので、ここでは繰り返さない。

(4) シェークスピア・初出「シェ、クスピア」。以下同様。

(5) 此の段の議論、全く没理想の字義に就きて、先生と我れと解を異にしたるより生じたり。「此の段」は、初出「此段」。以下同様。鵬外は「没理想」を「無理想」と解釈した。さらに「没理想」とは、作者が登場人物に対する評価を行なうことによつて、作者の主観・意見を表わすこと（挿評）を否定する主張であると解釈した。すなわち、「没理想」は「純客観」であると考へたわけである。したがつて、叙情詩や小説より、戯曲や叙事詩が優れているかのごとき誤解が生じたわけである。

(6) わが嘗て物したる緒言・「シェークスピア脚本評註 緒言」（『早稲田文学』創刊号、明治二十四年一〇月）を指す。「マクベス評釈」の緒言として、その心構えを述べたもの。以下、引用されるように、逍遙は、シェークスピアの作品は「没理想」であること、したがつて、その作品を評釈するにあつても、自分の解釈をさしはさまず、語句の注釈にとどめる旨を述べている。なお、「シェークスピア脚本評註 緒言」については、前稿「没理想論争注釈稿（二）」（『文芸言語研究 文芸篇』二二号、一九九二年三月）で注釈した。

(7) われいまだ嘗て無理想といふ意味の没理想をシェークスピアの本体なりともいはねば・逍遙は、シェークスピアの作品が自然に似て、さまざまな解釈が可能であることを指して、理想が隠れているとして、

「没理想」と呼んだ。実際、逍遙はシェークスピアが「無理想」だと主張したことはない。

(8) 「不見理想といふ意味の没理想をも、大詩人の本領なり、といひし」となし。「不見理想」は、見えない理想、隠れている理想。後の引用

「其の美術家たる伎倆を賞するは固より可かるべく」云々に対応する。

「大詩人の本領」はさまざまにあり、「没理想」は、その一部に過ぎないという論法。

(9) 『マクベス評註』の緒言・「シェークスピア脚本評註 緒言」のこ  
と。注(6) 参照。

(10) 「インタープリテーション」・初出「インタルプリテーション」(以下同じ)。逍遙は、「シェークスピア脚本評註 緒言」の中で、「評釈といふにも二法ありて、有りの仮に字義、語格等を評釈して、修辭上に及ぶも一法なり。作者の本意もしくは作に見えたる理想を發揮して、批判評論するも評釈なるべし。」と述べ、自分は前者の方法を取ることを明言している。ここでの「インタープリテーション」は、後者の方法に属するが、この方法では、注釈者のつまらない主観が入り込むことになってしまう。それで「区々たる」といった。

(11) 詩を論ぜんとてもしたるにもあらねば、シェークスピアを論ぜんとてもしたるにもあらず。・逍遙の「没理想」の論は、もともと、『マクベス評註』の緒言の中で注釈の方針を述べたものに過ぎず、

文学論を意図したのも、シェークスピア論を企てたものでもなかった。後に「シェークスピア総論の一斑とだに名づけざる」とある通りである。それに対して批判をした隅外の方にこそ無理があるわけだが、それにも関わらず、論争が起こったのは、逍遙が「我れにあらずして汝にあり」(『早稲田文学』三号、明治二四年一月)で、「没理想」が評論全体に及ぶかのごとき発言をしてしまったことによる。坂井健「没理想論争の発端—斎藤緑雨と石橋忠案の応酬をめぐって—」(『解釈』平成七年四月) 参照。

(12) 「げにやシェークスピアは空前絶後の大詩人ならん。…これのみの

理由によりて理想高大なりと云ふは信がたし」・「其の美術家」は、初出「其美術家」。以下同様。この部分は、「没理想」が「無理想」でないことの論証として引用されている。なお、逍遙は没理想的な作品をすでに「底知らずの湖」(『読売新聞』明治二四年一月一日)で、「底知らずの湖」に喩えている。

(13) 「若しシェークスピアを称美せんとならば、其の美術家たる伎倆を賞するは固より可かるべく…只其の理想なるをたゞふべし」・「伎倆」は初出「伎倆」。以下同様。この部分の引用は、「没理想」は、シェークスピアの優れている点の一部に過ぎないと自分は考えており、「没理想」を大詩人の本領であるといったことはないのだ、という主張の根拠として引かれている。次の「またシェークスピアが本領の美は、偏へに没理想(其の理想の見えざる所)にありとしもいはずること、明かなるべし。」に続いて行く。

(14) 「此の證例甚だ不足なれども、…此のたびの評註にては、主として打見たる仮の趣きを描写することを力め、我が一料簡の解釈をば加へざるべし」・「料簡」は、初出「了見」。この部分の引用は、没理想の作品には没理想の態度で評釈するべきである、すなわち、没理想の論は評釈についていったものだということの根拠として引かれている。次の「わが没理想の詩論に關繋する所は、間接にして、評註の方法に關繋する所は、直接なること、弁せずとも明かなるべし。」に続いていく。

先生はわれを難じて、理想のあらはれざる戯曲に長ずるために、シェークスピアを大といひ、理想のあらはるゝ叙事詩もしくは小説に長ずるために、バイロン、スキフトを小なりといへりと、いはれたれど、これはた此方の覚悟せぬ所なり。わが例の緒言の中に、下の如き一節あり、曰はく「シェークスピアの傑作は頗る造化に似たり、上は審美

の見識に富みたる学者より、下は一知半解の者までも彼の作をもてはやすは、一つは故人が激賞したるを伝へきよて、雷同附加するにも因ることならぬ、一つは彼の作、度量甚だ広くして、能く衆嗜好を容るること、猶は自然の風光の、万人を樂しましむるがごときに原くならん。パイロン、スキフトなどの作の、或人に喜ばれて、他の人に嫌はるゝとは、大なる相違なり。」と。こはパイロンらが作の、その度量に於て、シェークスピアの作に劣れるをいへるのみ。詩人としての優劣此の点にありといふ意味のことは未だ曾ていひしことなし。畢竟は此の度量の論も、解釈の難易を思へるより生じたり。それを詳かにいふ時は、ミルトン、パイロン、シェリーらのごとくに、おのが抱懐せる一理想をさながらに打出だして見せたらば、そを一つ／＼分析して、これは云々、これは箇様々々と、解釈批評せんも難きことにはあらねど、ひとりシェークスピアが傑作に至りては、上は審美の見識に富める学者より、下は一知半解の輩までおのがじし取り／＼に思ひ惑ふことあり、その作者の理想が幾重にも見えて、其の本意の所在、ドラマ全局面には顯著ならず、殆ど見えす、との義なり。詩の大小をいへるにはあらず。若しまた然らずして、かの没理想といへることが、ドラマ全局を掩ふべき唯一絶対の妙相なりせば、何でふその他をいふ必要あらんや。「シェークスピアを称美せんとならば、其の美術家たる伎倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙(云々)これらをほめて空前といふも可かるべく、只其の理想をほめて、高しといふは信げがたし。」と、とりわきていふ必要あらんや。詩人とは即ち美術家の謂ひにして、美術家の伎倆とは、取りも直さず詩人の本領といふ

ことなるをや。<sup>(9)</sup>

注

(1) 先生はわれを難じて、理想のあらはれざる戯曲に長ずるために、シェークスピアを大といひ、…これはた此方の覚悟せぬ所なり。・鵬外の論は、没理想すなわち無理想、すなわち至上の文芸的価値を持った作品という誤解に基づいており、そのために、シェークスピアとパイロン、スキフトとの間に価値上の差異があると逍遙が主張しているかのような受け取り方になっている。もつとも、詩人としての優劣には触れていないとは言ふものの、以下「パイロンらが作の、その度量に於て、シェークスピアの作に劣れる」とあるように、この点については、鵬外の誤解も無理のないことであつた。

(2) 度量・心の広がり。ここでは、さまざまな解釈が可能であることから、人生観が推し測り難い点について言っている。具体的には、次の「解釈の難易を思へる」云々以下に述べられるとおり。

(3) シェリー・初出「シェリー」。なお Percy Bysshe Shelley (1792-1822) は英国の叙情詩人。

(4) おのが抱懐せる一理想をさながらに打出だして見せたらば、そを一つ／＼分析して、これは云々、これは箇様々々と、解釈批評せんも難きことにはあらねど・作者の人生観がはつきりと現れているならば、作品に即して一つ一つその人生観を分析し、作者の意図を解釈することも難しくはないが、の意。シェークスピアの作品では、現れていないので、分析・解釈することができない。

(5) 取り／＼に・初出「とり／＼に」

(6) ドラマ全局面・戯曲全体を総合的に見た場合の姿。後に、一登場人物にのみ着目した場合と対比される。

(7) 詩の大小をいへるにはあらず・作品の絶対的価値を云々しているのではない、の意。

(8) かの没理想といへることが、ドラマ全局を掩ふべき唯一絶対の妙相

なりせば、何でふその他をいふ必要あらんや・没理想であるかどうかだけが、作品の価値を定めると考えているのではない。その他にも作品の価値を決めるものは、さまざまにあると考えているからこそ、「美術家たる伎倆」「比喩の妙」などの例をあげたのだ、ということ。逍遙が、唯一絶対の評価基準を嫌うのは、「既発四番合評」〔『読売新聞』明治三十年一月二月〕で、小説を「固有派」、「折衷派」、「人間派」に分けながらも、それぞれに上下の別を与えなかったことと、相通じている。

(9) 美術家の伎倆とは、取りも直さず詩人の本領といふことなるをや・美術家の伎倆とは詩人の本領ということなのだから、なおさらシェークスピアの価値が、「没理想」であることだけにあるとはいっていない、という反論。鵬外の「理想なきを大詩人の本相なりともいはず」を受けている。

さればこそ、第一号の再版（十一月九日版）<sup>(1)</sup>には此処の文章に訂正を加へて、「美術家たる伎倆」といふ稍々有形なる詞をもてして、読者が便宜をば計りたれ。<sup>(2)</sup>

注

- (1) 第一号の再版（十一月九日版）・現物未確認。ただし、『早稲田文学』二号（明治三四年一〇月三〇日）の広告欄に「愛読数千部の外に出で既に第一号をして再版の運に至らしめたり」とある。「美術家たる伎倆」の部分の初出は「其の人間の性情を活動せしめる伎倆」。
- (2) 読者が便宜をば計りたれ・「計りたれ」は、初出「はかりたれ」。また、初出では、この後改行されない。「美術家の伎倆」という技術的・外的な語に変えたのは、思想的・内的な「理想」と対置させて読者に分かりやすくしたからだ、ということ。

それはともかくもあれ、わがシェークスピアを没理想と説きたりし所以の、詩人としてのシェークスピアを月旦<sup>(1)</sup>せんためにあらざりしことは、これを見ても明かに知らるべし。絶対の意味にては、われは、むしろシェークスピアを一家の理想家として評しつ。理想を見ざる理想家として品しつ。(彼れも一個の人たるのみ、本来理想無かりきといはんや。)<sup>(4)</sup>さて、その点よりいふ時は、近松とシェークスピアといとよく似通へりといひつ。しかしながら、近松とシェークスピアとが、詩人として同じとも、その伎倆相等<sup>(6)</sup>しも、近松の葉の末に置く、露ばかりだにいはざりき。<sup>(7)</sup>烏有先生は我れを難じて、「近松は戯曲を作りけれども、その客観相を現はしたる中に、類想に近き所あれば、到底シェークスピアには及ばざるべし。」といはれしが、われも現に、緒言の中にて、近松の没理想をことわりたる後、更に言葉を添へていへらく「勿論、さるは理想のみの解なり、美術家としての伎倆の上には其のころの子と雖も、二者を同じさまには見ざりしなり」と。この「そのころ」といふ詞を味はれなば、わが本意の在る所は知らるべし。<sup>(8)</sup>即ち近松に目のくらまんとせし折にすら、美術家（詩人）といふ資格にては、二者を同じさまに見ざりきといふ心なり。究竟、わが近松をシェークスピアと似たりといふは、その没理想なる一点のみ。理想のおぼろげなるが似たりといふのみ。指頭大の明玉に近松が作を喩へ、拳大の明玉にシェークスピアを譬へたるも、その相の相似たるをいへるにて其の質必等といへるには非ず。<sup>(9)</sup>緒言にいふ所は、徹頭徹尾、ドラムを解釈せざる由縁を反復丁寧したるに過ぎざるを思ひたまへ。然らば何故に「近松をして英国の文壇に生まれしめば、我が国の浄瑠璃

作者にて終はらんよりは、實かにまさりたる位置に上りしならん。」  
 とはいひしぞ、と問ふ人あらんか。その解いと易し。われは、英国の  
 小批評家が、或ひは宗教上の小理想をもて、或ひは没美学的俗見をも  
 て、只管シェークスピアの皮相に拘泥し、或ひは其の耳を撫でて全体  
 を品し、或ひは其の足を擦りて全軀を評し、或ひは尻尾を、或ひは鼻  
 を、おのが短き身の丈に應じて、手当り任せなる揣摩をほし、まゝに  
 し、恰も全象を知り貌に、理屈評を下したるが可笑しさに、我が近松  
 の如き作者も、全く審美的眼光無くして、只管理屈にのみ拘々たる英  
 国の如き文壇に生まれて有名なる諸大家に称されなば、忽ち大出世す  
 るならん、と想像のまゝをものせしなり。今一たび読みかへして、味  
 はれなば、わが意蓋し明瞭なるべし。

注

- (1) 月旦・批評。品定め。
- (2) あらざりしことは、これを見ても・初出「あらざりしことを見て  
も」
- (3) 絶対の意味にては・逍遙は、「没理想の語義を弁す」(『早稲田文学』  
八号、明治二五年一月)で、「没理想」を「造化」に對する場合と、  
ドラマに對する場合とで分けてゐるが、これは前者にあたる。すなわ  
ち、シェークスピアの世界や宇宙に對するもの見方の意味では、と  
いうこと。
- (4) (彼れも一個の人たるのみ、本来理想無かりきといはんや)・逍遙  
は、シェークスピアとその作品を造物主と宇宙のアナロジーで捉えて  
ゐる。そのため、「彼も一個の人たるのみ」といった表現が現れる。
- (5) その点・「理想を見ざる理想家」である点。
- (6) その伎倆相等し・初出「その伎倆相ひとし」

- (7) 近松の葉の末に置く、露ばかりだにいはざりき・「近松」の「松」  
と「松の葉」の「松」が掛け詞で、「近松の葉の末に置く」が「露」  
の序詞となっており、「露」が否定の副詞「つゆ」に掛けられている。
- (8) この「そのころ」といふ詞を味はれなば、わが本意の在る所は知ら  
るべし・逍遙は明治三三年暮れ、水谷不倒らと近松研究会を開いてい  
る。

(9) その相の相似たるをいへるにて其の質必等といへるには非ず・さま  
ざまな解釈を容れうる自然のような姿が似ているといったのであつ  
て、作品の芸術的完成度がまったく同じであると言つたのではない、  
の意。

(10) 或ひは其の耳を撫でて全体を品し・以下、「其の足を擦りて」、「或  
ひは尻尾を、或ひは鼻を」、「手当り任せなる揣摩を」、「恰も全象を知  
り貌に」などは、「群言象を撫」を踏まえている。

(11) 我が近松の如き作者も、全く審美的眼光無くして、只管理屈にのみ  
拘々たる英国の如き文壇に生まれて有名なる諸大家に称されなば、忽  
ち大出世するならん・「シェークスピア脚本評註 緒言」に「佛に、  
独に、米に、魯に、近松をもてはやすもの増加するに至りなば、たと  
ひシェークスピアに及ばずとするも、是等多人数の功力にても我が国  
の浄瑠璃作者にて終らんよりは、はるかにまさりたる位置に上りつら  
む。」とあるのを受ける。英国の批評家にも、逍遙が批判的な視線を  
向けていた点、注目されよう。

われ、已に没理想をもてドラマの本体を評し尽くしたる詞とせずし  
て、寧ろシェークスピアの作の一面相の特質としたり、悉しくいへ  
ば、シェークスピアの傑作には、毎に此の特殊なる一面相を具へたり、  
といへり。夫れ惟々シェークスピアが作の一面相をいへるのみ、こゝ  
を以て、没理想と大戯曲と同じ意味なりといひしことも無ければ、没

一九九七年一〇月一六日受理

理想の作者は即ち大詩人なり、ともいはざりき。さればまた、われは没理想といふことが大詩人の本領なる由を發明したり、ともいはざれば、シェークスピアが没理想にして自然に似たるは不思議なり、ともいはざりき<sup>(3)</sup>。われは只シェークスピアの『マクベス』を評註するに当たりて、わがをさなき小理想<sup>(4)</sup>によりて、作者を推度するは益なければ、評註は総て修辭学上の評註にとどめ置くべし、といひしのみ。弁じてこゝに至らば、わが本意の、戯曲もしくはおしなべての詩の論にもあらざりしこと瞭然たるべし。

注

(1) われ、已に没理想をもてドラマの本体を評し尽くしたる詞とせずして、寧ろシェークスピアの作の一面相の特質としたり・前段までのまとめ。没理想は作品の絶対的価値基準ではなく、表現の「伎倆」や「比喻の妙」などと同様に、一つの側面について言ったの過ぎない。だから、「没理想と大戯曲と同じ意味なりといひしことも無<sup>(1)</sup>」ということになる。

(2) 惟々・初出「惟」。ただただ。単に。

(3) 没理想と大戯曲と同じ意味なりといひしことも無ければ、没理想の作者は即ち大詩人なり、ともいはざりき。…シェークスピアが没理想にして自然に似たるは不思議なり、ともいはざりき。・逍遙は、「不思議なり」といってはいないが、「シェークスピア脚本評註 緒言」に、「シェークスピアの傑作は頗る自然に似たり。」とある、苦しい弁解ではある。

(4) をさなき・初出「おさなき」。